



小児科専門医
川村 和久

仙台市在住。医療法人社団かわむらこどもクリニック(仙台市)院長。日本一の小児科サイトを運営。「お母さんの不安・心配の解消」を開業理念として、様々な子育て支援活動に取り組んでいる。
仙台小児科医会会長。宮城県小児科医会副会長。日本外来小児科学会理事。
<http://www.kodomo-clinic.or.jp>



かわむらこどもクリニック
フェイスブックページ



いたちごっこの麻しん対策

皆さんは、「なんで、今頃麻しんなの？」(2014年6月号)を覚えていらっしゃるでしょうか。その年には春先まで感染者が増加し、流行の拡大が懸念されました。記事には、麻しんの解説だけでなく、ワクチン接種の重要性を強調しました。流行とは裏腹な話題になりますが、昨年3月に日本固有(土着)のウイルス株による患者が3年間にわたってなかったことから、日本は「麻しん排除国」に仲間入りしました。麻しん排除に関しても当院のNEWSで、排除状態を維持するためのワクチンの重要性を伝えました。

麻しんが排除されたにもかかわらず、7月頃から集団感染と流行がマスコミを賑わせています。9月(37週)までに、昨年の患者数(35人)の3倍を超える130人が報告され、大阪府が52人で最も多く、千葉県21人、兵庫県18人、東京が14人の順となっています(感疫研)。

当然のことながら、「排除されたのにどうして？」と疑問を持つ方も多いでしょう。大阪の流行は、関西空港職員の集団感染に端を発したもので、ここ数年はすべて海外から持ち込まれたものなのです。近年は成人の輸入感染が中心となり、海外への乗客が行き交う空港が最も危険な場所となっているのです。参考までに、今年毎の感染者数をグラフに示しました。今年は短期間に集団感染が拡大したことにより、昨年と比べると急増しているように見えます。しかしながら、グラフを見る限り昨年から比べると、以前と何も変わっていないのかもしれない。

麻しん流行のたびにマスコミが取り上げ、国や自治体、加えて専門家から様々な注意喚起や対策が呼びかけられます。自分も流行のたびに記事を書き、ワクチンの重要性を伝えます。2年前に「ママゴン」に書いた記事を再び取り上げなければならぬことは、小児科医としてはとても悔しいことです。

原因は一体どこにあるのでしょうか。結局、すべては他人事という意識に起因し、私だけは大丈夫という誤った認識がいたちごっこ元凶となっているのです。その意識が変わらない限り、今後も集団感染は続いていくでしょう。

初期はカゼと区別ができません、遅れて出る発疹によって診断される時にはすでに、ウイルスを撒き散らしています。また、インフルエンザの10倍の感染力を持ち、空気感染をすることから通常の予防策は役に立ちません。結局唯一の予防策は、ワクチン接種だけなのです。しかしながら、未接

種者や1回接種者が問題なのです。風しんに関しても全く同じことが言えます。

繰り返し書きますが、予防にはワクチンしかありません。

- ① MRワクチン定期接種を早めに接種
 - ② MRワクチン未接種者は、緊急に接種
 - ③ ワクチン1回接種者は、MRワクチン追加接種(2回接種)
 - ④ 30才以上50歳未満も、社会を守るためにMRワクチン接種
- 家族や社会を守るという意識を持ち、大人が先頭に立ってワクチンを接種しましょう。

麻しんの累積報告数の推移 2010~2016年(第1~37週)

